

地域協働型子育て支援「にいみ子育てカレッジ」におけるアウトリーチの考察

－遠隔地域Aでの三世代交流事業－

三好 年江*

新見公立短期大学幼児教育学科

(2015年11月18日受理)

本稿の目的は、地域協働型子育て支援「にいみ子育てカレッジ」が、2013年8月から2014年2月の間に行ったアウトリーチ^{注1)}「三世代交流事業」について報告し、取り組みの考察を行うことである。対象は、交流事業の企画・運営に関わった遠隔地域Aの代表者およびカレッジ関係者と、当日の交流活動「節分行事」に参加したA地域住民である。研究方法は、質的研究法のアクションリサーチ^{注2)}を用いた。結果、本事業でカレッジのネットワーク力やエンパワメント力が発揮され、住民は、世代間交流の楽しさを味わい多様な世代がつながる必要性を実感した。また、事業の企画・運営に関わった実施者や活動の参加者は、事業の中でそれぞれが持つ力を相互に引き出し合いエンパワメントされていった。実施後には、地域内に世代を超えた新たな交流が生まれ、A地域とカレッジが引き続き情報交換を行い、次年度について検討するなど新たなネットワークの形成が見られた。

(キーワード) アウトリーチ, ネットワーク, 三世代交流, エンパワメント

I 研究の背景と目的

2008年4月より取り組んできた地域協働型子育て支援「にいみ子育てカレッジ」(以下、カレッジ)は8年が経過した。カレッジは、大学・行政・地域で組織された運営委員会や事務局などのネットワークやそれぞれの専門性などを生かし「子育ての社会化および子ども・子育てを核とした地域づくり」を目指し、これまで様々な取り組みを行ってきた。取り組みについては、1年毎に子育て当事者などで組織される評価委員会で、外部評価を受け、次年度の取り組みにつなげているところである。

2013年度の評価委員会では、拠点である大学内の親子交流ひろば「にこたん」での取り組みは、質・量ともに年々充実してきていると高い評価が得られた。特に、「ママスタッフ活動」^{注3)}や、「にこたんタイム」^{注4)}などのエンパワメントに関する事業は、カレッジが協働する中で構築してきた取り組みとして高い評価が得られた。一方で、潜在的なニーズがあるにも関わらず、カレッジにつながっていない人や地域があることが課題として挙げられた。また、子育てに関する知識や昔遊びなどのノウハウを持つシニア世代を子育て支援に巻き込むなど、地域をエンパワメントする視点も挙げられ、N市全体を視野に入れたアウトリーチの必要性が指摘された。

アウトリーチについては、社会福祉や保健福祉など様々な領域において、取り組まれており、その効果も

実証されている。金子は、地域における支援を求めない家庭に、ネットワークとアウトリーチをマネジメントし、家庭にアクセスすることで親子の変容を促した¹⁾と研究の成果について述べている。地域子育て支援拠点においても「飛び出すひろば」や「アウトリーチ型支援」として、地域の中に出向き、潜在的なニーズを読み取りながら子育て支援を実施するなど様々な取り組みが行われている。一方で、保育者養成校においては、学内に子育て支援施設を設置したり²⁾⁻⁴⁾、教員や学生が子育て広場等に出向いて実践をしたりという取り組み⁵⁾が徐々に増加しているものの、アウトリーチの視点を持って取り組んでいるところは数少ない。更に、保育者養成校が、地域協働型の子育て支援に取り組みながら、一般の地域住民と共に企画・運営するアウトリーチの実践やその成果を報告しているものは見られない。

そこで、2014年度は、カレッジの持つ機能や特色を地域に出向いて発揮する取り組み「アウトリーチ」に取り組むこととした。

本講の目的は、カレッジが遠隔地域A(以下、A地域)において実施した「三世代交流事業」の内容を報告し、取り組みの検証を行うことである。

II 研究の方法

1. 期間: 2013年8月~2014年2月

*連絡先: 三好年江 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

2. 対 象 :

- ①事業の企画・運営に関わった A 地域代表者およびカレッジ関係者: A 地域福祉ネットワーク推進会 (以下, ネットワーク) 会長・副会長, 婦人会代表, 地域住民が運営する認可外保育施設幼稚園 (以下, 幼稚園) 保育者, N 市社会福祉協議会 (以下, 社協) 地区担当者, 社協カレッジ担当者, N 市健康づくり課, 県民局, カレッジ親子交流ひろばスタッフ (以下, スタッフ), 大学カレッジ担当教員 (以下, 大学教員)
- ②交流活動の参加者: 翠翔会, A 地域福祉ネットワーク推進会 (以下, ネットワーク) 会員および一般の高齢者 (以下, シニア世代), 婦人会, 地域住民が運営する認可外保育施設幼稚園 (以下, 幼稚園) に在籍する親子, 幼稚園の保育者, 学生, スタッフなど計84人

3. 方 法 :

質的研究法であるアクションリサーチを用いた。分析の方法は, 事業のプロセス記録と会合の記録整理および参加者の感想内容分析である。

4. 倫理的な配慮

調査対象者には口頭にて研究の目的等の説明を行い, 回答の記入を持って同意を得たと取り扱った。データは個人が特定されないよう十分配慮した。

III 結果

1. 「三世代交流事業」実施までのプロセス

1) アウトリーチ対象地域の選定

本取り組みは, 県民局の「三世代交流地域子育て環境活性化事業」の委託金30万を受けて実施した。事業を行う対象地域の決定は, 様々な機関や人が協働しているカレッジの特色やネットワーク力などを生かし, N 市社会福祉協議会および N 市健康づくり課との情報交換や協議により行われた。選定の理由は, 「世代を超えた人々が子育てに関わる地域づくり」が可能であること, つまりシニア世代や子育て世代など, 様々な人々が地域に存在し生活していること, また, 拠点である大学から離れておりカレッジとのつながりが薄く利用が少ないということであった。

具体的には, N 市社会福祉協議会地域福祉推進課の各地区担当者よりシニア世代の分布や活動状況などの情報提供が行われた。同時に, N 市健康づくり課の各地区担当保健師より, 子育て家庭の分布や親子の生活状況等についての情報提供が行われた。両者からの情報を合わせ事業の可能な地域について検討した結果, 遠隔地域 A が「三世代交流事業」予定地域に挙げられた。その後, 社協

が該当地域の代表者とカレッジの関係者を橋渡しして会合を設置し, 話し合いをした結果, 事業を実施することとなった。

2) 関係者の会合

事業を行うにあたって, カレッジの関係者および A 地域の代表者などが, 表 1 のように 7 回の会合を実施した。

表 1 三世代交流事業実施までの実施者間による会合

回	日時	場所	出席者	内容
1	2014.9.8	社会福祉協議会本所	社協地域福祉推進課長, 地区担当者, 社協カレッジ担当者, 大学教員, スタッフ 計 5 人	事業の趣旨説明, 対象地区の検討
2	2014.10.1	社会福祉協議会本所	社協地域福祉推進課長, 地区担当者, ネットワーク会長・副会長 2 人, 大学教員 2 人, スタッフ 2 人 計 8 人	事業実施者顔合わせ, 事業の趣旨説明, 今後の計画, 内容の検討
3	2014.11.19	A 地域内幼稚園	ネットワーク会長・副会長, 幼稚園保育者, スタッフ 2 人 計 5 人	活動内容や参加者, 役割分担などについて協議
4	2014.11.26	大学内親子交流広場「にこたん」	幼稚園保育者 1 人, スタッフ 2 人 計 3 人	三世代交流活動に関する準備や段取りについての検討
5	2014.12.18	A 地域総合センター	ネットワーク会長, 婦人会代表, 地域代表 2 人, スタッフ 2 人 計 6 人	参加者の確認, 活動の進行および事前準備など詳細な内容の検討
6	2015.1.24	A 地域総合センター	ネットワーク会長・副会長・理事, 婦人会会長, 幼稚園保育者, スタッフ 2 人 計 7 人	交流活動の最終打ち合わせ
7	2015.1.30	A 地域総合センター	ネットワーク会長・副会長・理事, 婦人会会長, 幼稚園保育者, スタッフ 2 人 計 7 人	当日の準備の確認および前日の準備

3) A 地域における各世代への事前レクチャーの実施

三世代交流活動を実施するにあたり, 子どもや子育ての現状を知り, 子どもが育つために必要な条件, 子育てに様々な世代が関わることの意義などを考える機会を設けた。A 地域住民とカレッジの橋渡しは A 地域の各代表や A 地域高齢者を対象に本学看護学部が実施している「サテライト」担当の大学教員が行った。座談会や講座の講師は大学のカレッジ担当教員 (筆者) が行った。

表 2 三世代交流における事前レクチャーの実施

回	日時	場所	出席者	内容
1	2014.10.31	A 地域内公民館	幼稚園保育者および保護者計 9 人, 大学教員, スタッフ 計 11 人	「子育て座談会」 子どもに育ちに重要な多様な人との関わり体験について
2	2014.12.18	A 地域総合センター ※本学看護学部主催の「サテライト」内	シニア世代 (サテライト出席者) 20 人, ネットワーク会長, 婦人会 3 人, 幼稚園保育者, 社協地区担当者, 看護学部学生および教員 10 人, 県民局, スタッフ 2 人, 大学教員 計 39 人	「孫育てミニ講座」 子育ての環境や考え方の変化, 子どもの育ちや子育てにシニア世代に期待される役割など

2. 三世代交流事業「節分行事」の実施

1) 実施内容

2015年 1月31日 (土) 10時から14時, A 地域総合センターにおいて三世代交流事業「節分行事」が行われた。当日

の主な内容は、①伝統行事「節分」の謂れを知る、②お面作り、③豆まき、④巻き寿司づくり、⑤会食であった。参加者は、翠翔会やネットワークの会員および団体に属さない高齢者（シニア世代）、婦人会会員、幼稚園に在籍する親子、幼稚園の保育者、学生、スタッフ、大学教員など計84人であった。当日の役割は表の通りである。

表3 節分行事の役割

役割	所属	役割	所属
司会	幼稚園保育者	巻き寿司の作り方説明	婦人会
挨拶	シニア	お面作り・寿司づくり	親子・シニア
節分の謂れ	シニア	会食の準備・挨拶	子ども・学生
巻き寿司の下準備	婦人会	紙芝居	学生
会の調整	スタッフ	鬼の役	シニア

2) 三世代交流事業の振り返り

(1) 参加者の気づき（感想内容分析）

活動後、参加者は「活動に関する振り返り」として質問項目に答えた。回答者は51人であった。参加について回答した48人全員が今回の三世代交流事業について「参加してよかった」と答えている。理由の記述があったものは38人で、最も多かった理由は、「交流の意義を実感した」が17人であった（表4）。次回の参加について回答した44人中43人が「次も同様の交流会があれば参加したい」と答えた。1人については「分からない」と答え、理由は「都合が合えば」と条件があった。

世代別に参加してよかった理由を見てみると、親世代（幼稚園保護者）は、「交流の意義を実感した」が最も多かった（表4）。記述の内容には「家のおじいちゃんやおばあちゃん以外の方となかなか交流できないから」や「地域の方との交流は、子どもにとっても親にとっても教わることもある」など交流の意義を挙げている。

シニア世代は、「楽しかった」や「気分が変化した」の理由が多かった（表4）。記述の内容には、「久しぶりに子どもと関わり楽しく元気をもらった」「今日一日で一年長生きが出来たようだ」と気分転換が図れたことや、「昔と違い家族での触れ合いが少なく子どもの声すら聞こえないのでとても楽しかった」「孫は遠くにいてすでに成人に近いので小さい子ども達と一緒にいると楽しい」と子どもとの触れ合いそのものを楽しんだことが挙げられていた。

婦人会は、親世代同様、「交流の意義を実感した」の理由が最も多かった（表4）。記述の内容は、「地区のつながりが深まる」「このような機会があれば色々なことが聞けてお互いにいい」などがあった。

学生も、「交流の意義を実感した」が最も多かった（表4）。記述の内容は、「子どもがはしゃいでいる姿を温かく見守ってくれていたように感じた」「こ

のような地域交流によって地域で子どもを支援したり高齢者と交流を深めたりすることができると思った」などがあった。

表4 活動に参加してよかった理由

(A:親世代 B:シニア世代 C:婦人会 D:学生) N=38人

理由	A	B	C	D	計(人)
触れ合いができた	3	1	2	2	6
学びを得た	2	0	2	2	6
交流の意義を実感した	6	2	5	4	17
気分が変化した	0	3	0	0	3
楽しかった	0	4	2	0	6

(2) 実施者の振り返り（会合の記録より）

A 地域の事業実施者達は、自身の地域について、「比較的人と人との繋がりがあり、各種団体ごとにとままりがあると思っていた」「核家族は少なく、祖父母と暮らす世代が多いことから世代間の交流もあると思っていた」とこれまでの認識を述べた。

しかし、「生活時間やスタイルの違いから同じ家に暮らしていても世代間で十分関わりがあるとは言いがたく、地域の中でも、多様な世代が交流することはあまりなかったのではないかと」ことに気付かされた」と改めて自身の地域の課題に気付いたと認識の変化について述べている。家屋が点在する山村地においては、多様な人が自然に交わることが少ない。本地域において、子どもが育ち育てに喜びが持てるために世代間が交流する意義を再認識し、自分たちで意図的なきっかけづくりをする必要性があると実感した。

IV 考察

今回の事業の成果は、大きく3つ挙げられる。一つ目は、活動を通してシニア世代や親世代などが地域の中で異なる世代が交流することの意義を実感したこと、二つ目は、事業実施を通して関係する人々がエンパワメントされたこと、三つ目は、新たなネットワークが形成されたことである。以下、上記3点について考察を行う。

1. 地域住民の気付きと意識の変容

活動後の感想からわかるように、本活動に参加したシニア世代、親世代また婦人会世代（50歳代～60歳代）は本事業の意義を理解し、子どもの育ちや子育てにおいて多様な世代が関わることの大切さを実感した。活動後には、親世代から「昔ながらの遊びを今の子どもに教えていただけたら楽しいと思う」「三世代が一緒に年間の行事をやりたい」や、シニア世代からは「もっと交流がある活動でもよい」「地域全体でやりたい」など、次年度の取り組みに対する様々な意見が出るなど交流の意欲が見ら

れた。

本事業の特徴は、様々な機関や人と協働するカレッジの特色を生かし、事前の会合や準備などのプロセスに重点を置いたことである。このことにより、地域の実態や潜在的なニーズなどが見え、事業に巻き込みたい地域の団体や、参加者の一人一人が楽しみ、力を発揮できる活動内容など地域の代表者と共に考えていくことができた。更に、事前のレクチャーとして、三世代交流の意義について考える座談会や講座などを実施したことにより、年代や価値観が異なる世代同士が「共感的理解」を持って活動に参加することができた。活動の中で見られる少し気になる言動についても、批判的に捉えるのではなく「理解しよう」と言動の背景を考え、優しく対応したり、労わったりする姿も見られた。

このことから、参加者は交流そのものを純粋に楽しみ、ほぼ全員が、次も参加したいという気持ちになった。このように、活動の意義を感じて、次に繋がる発展的、継続的な事業を行うためには、綿密に練られた計画や事前の準備が重要であることがわかった。特に、その地域が持つ人的、物的資源や課題などは、地域で暮らす人々の声を聴き、カレッジのように関わる主催者が十分理解しながら協働の視点を持って行うことが重要であると考えられる。

2. エンパワメントの実際

本事業は、カレッジの特色である協働の視点を持ちその力を発揮しながら進めていった。

その結果、関わる人たちがそれぞれエンパワメントされていく様子が見られた。森田は、エンパワメントについて「人と人との関係性のあり方、人と人の生き生きとした出会いの持ち方」であり「お互いがそれぞれ内に持つ力をいかに発揮しえるかという関係性」と説明している⁶⁾。本事業では、事業の企画・運営に当たって、カレッジ関係者とA地域におけるネットワークのキーパーソンとなる代表者等が目的を共有し合い、話し合いを繰り返し顔なじみになっていった。

その結果、互いを理解し力を出し合う関係が作られていったと考える。スタッフは「利用者が主役として輝き自身も楽しい。つまり、日常的にひろばで実践していることをやればいいのだ」とエンパワメントすることが自分達の持つ専門性の一つであることに気付く機会にもなった。幼児園保育者は、当日の活動を振り返り「子どもが持つ力に気づき、地域における幼児園や自身の役割を理解した」と述べている。更に、A地域の代表者たちは、事業を計画していく中で、自身の地域の人や物、場などの資源に目を向け、「それぞれの団体には結束力があり助け合う地域力はあるが、様々な世代が十分に繋がっていないのでは」という課題に気付いていった。そこで、交

流事業に誰を巻き込みたいか、また、それぞれの出番や役割はどうするかなど意欲的に考え準備を進める姿が見られるようになった。

また、当日の参加者も、世代が異なる住民たちが、それぞれに役割を持ち、一緒に活動する参画型のイベントを通して、自身の得意なことや役割に気づき、一人一人の生き生きする姿が引き出され合うなどエンパワメントされていく過程が見られた。

3. 新たな子育てネットワークの形成

本事業を実施するに当たって、大きく2つのネットワークが形成されたと考える。一つは、カレッジとA地域であり、二つは、幼児園を核としたA地域内子育てネットワークである。これまで、A地域の関係者はカレッジの存在は知っていたが、何を目的にして、どのようなことを行っているかなど知らなかった。カレッジは、これまでN市民に向けて、地方の機関紙や市報、ケーブルテレビなど様々な方法で情報発信をしてきた。

しかし、十分周知されていないことが分かり、「子育ての社会化および子ども・子育てを核とした地域づくり」を実現するためには、地域に出向いて実践するアウトリーチの必要性を改めて実感した。今回の事業により、A地域がカレッジを知り、カレッジがA地域を知る機会となった。今回の事業では、知り合うだけでなく、企画・運営について会合を繰返したり、共に準備を行ったりする中で仲間意識や連帯感が生まれ、カレッジとA地域に「新たなつながり」が形成された。

また、事前のレクチャーや座談会を通して活動に参加したシニア世代や親子世代、また中間的な存在の婦人会世代は、共に「世代間交流の意義を感じながら楽しく活動した」共通のプラス体験があった。このことにより、「地域内でのつながり」の芽が見られることとなった。

このように今回の子育てカレッジにおけるアウトリーチでは、関わる人たちにさまざまな気づきがあったり新たな関係が構築されたりとの成果が見られた。その背景には、カレッジがこれまでの取り組みで構築してきた①話し合いを繰り返したり事業などを共に実施（協働）しながら、相手を共感的に理解し力を出し合う関係を作ること②必要な人や機関などつながり事業に生かすネットワーク力③一人一人の持ち味や力を読み取り関係や活動を調整するコーディネート力④親子の育ちに必要な手立てや環境を作ったりする子育て支援力などの活用があったと考える。

今後は、A地域に形成された新たなネットワークが継続的に機能し、主体的に地域ぐるみの子育てに取組むための後方からの支援が求められると考える。取り組みの考察について、今回は学生の視点で行っていない。保育者養成課程において、子育て支援の力を育成するために

も地域と協働する視点は欠かせない。今後も地域への積極的な取り組みを実施し、継続的にアクションリサーチを行っていききたい。

謝辞

本研究にご協力いただきましたA地域の方々、カレッジ関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

注

- 1) 子育て支援広場等の支援者が他の施設や団体等に向いて行う支援
- 2) レヴィン (Lewin, K.) によって1940年代に提唱された社会問題の解決や改善を目的とした実践的な研究方法。
- 3) 子どもがよりよく育つために、また、子育てを楽しむために様々な活動を考え実施する自主活動グループ (2012年結成)
- 4) 親、学生、市内のボランティア等、様々な人が主体なり行事の企画・運営を行う。交流の促進、体験の共有、

主体となる機会の提供である。

文献

- 1) 金子恵美：地域における支援を求めない子どもと家庭への介入。ソーシャルワーク学会誌, 27, 55-65, 2013.
- 2) 小川清美他：実践力ある保育者養成実現の教育プログラム, 総合活動報告書, 東横学園女子短期大学保育学科, 2008.
- 3) 白梅学園短期大学：子育て広場を介し地域と学生と繋ぐ短大教育, 報告書, 白梅子育て広場 GP 委員会, 2009.
- 4) 梶浦真由美他：保育者養成校における子育て支援に関する研究 (1) - 学生のレポート分析を通して - . 北海道文教大学研究紀要, 30, 45-54, 2006
- 5) 指田利和：こども教育宝仙大学と東京都中区との地域連携について - 保育者養成・子育て支援・地域社会 - . こども教育宝仙大学紀要 3, 117-121, 2012
- 6) 森田ゆり：エンパワメントと人権, 岩波書店, 14, 2004.

